

本論文は

世界経済評論 2017年3/4月号

(2017年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

海をわたる機関車

: 近代日本の鉄道発展とグローバル化

東京理科大学大学院
イノベーション研究科教授

橘川 武郎



[著者] 中村尚史 (なかむら なおふみ)
東京大学社会科学研究所教授
[発行] 吉川弘文館, 2016年2月
[判型] A5判・ヨコ組, 262ページ
[定価] 3900円+税

「グローバル化」という言葉は、20世紀から21世紀への転換点前後からしばしば耳にするようになった印象が強いが、本書によれば、そもそも「第1次グローバル化」は、それよりちょうど100年前、19世紀から20世紀への変わり目後に生じたのだという。その「第1次グローバル化」の立役者の一つとなったのが機関車貿易であり、本書は、主として日本市場に焦点を合わせながら、機関車の輸入と鉄道の発展との関連を掘り下げている。

海外の博物館・公文書館・大学図書館を含む幅広い渉猟活動を通じて収集した史資料を駆

使して、筆者は、「海をわたる機関車」が織りなすことになった国際競争の実相を、ドラマチックに再現する。それは、①イギリスの独占(1882~87年)→②アメリカの台頭(1888~1902年)→③アメリカの覇権とドイツの急伸(1903~07年)→④イギリスの凋落と日本の比重増加(1908~12年)、という道筋をたどった。当初、世界の機関車市場を独占していたイギリスが、短期間にアメリカやドイツの後塵を拝するにいたったのは、(1)機関車型式の標準化と部品の互換性生産で特徴づけられるアメリカン・システムの導入に遅れをとったこと、(2)アメリカとドイツが熱効率にすぐれた過熱式蒸気機関車の開発という技術革新で先行したこと、などによるのだという。

上記の④の時期に「日本の比重増加」が見られたことからわかるように、機関車輸入から出発したわが国も、第1次世界大戦(1914~18年)の直前までには、自主技術の確立に成功し、機関車国産化に成功した。本書は、そこにいたるプロセスを、1906年の国有化を含む日本鉄道業の発展過程と重ね合わせながら、国内外の鉄道メーカーや商社の動向に光を当てて、詳細に描き出す。近年のグローバル化がそうであるように、「海をわたる機関車」を通して描き出される100年以上前の「第1次グローバル化」の実相も、躍動感に満ちあふれている。

ふんだんに掲載された機関車の写真が、読者の興味をかきたてる。一方で、表が章末にまとめられていることは、読むうえでやや煩わしい。「第1次グローバル化」の特徴はあくまで国際貿易の拡大にあり、海外直接投資に重点をおいた近年のグローバル化とは、やはり相当に様相を異にするな、との読後感ももった。

(きっかわ たけお)